

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年10月3日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職名・学年 博士課程4年

氏名 岡村 裕 輔

助成の種類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第17回欧州臓器移植学会		
発表題目	Subnormothermic machine perfusion preservation of >30% macro-steatotic livers; A new means to expand the donor pool?		
開催場所	ベルギー ブリュッセル		
渡航期間	平成 27年 9月 12日 ～ 平成 27年 9月 18日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加費	115,000円
		航空券	118,500円
		宿泊	95,000円
その他(交通費など)		21,500円	
当財団の助成について			

成果の概要／岡村裕輔 国際研究集会発表助成・若手

今回貴財団より助成いただき、2015年9月13日から16日にかけてベルギーブリュッセルで開催された第17回欧州臓器移植学会に参加し、研究成果を発表してきた。



初めて参加したが、本学会では欧州諸国のみならず北米・アジアなど世界中から臓器移植に関わる参加者がおり、臓器移植およびその関連分野における最新の臨床および基礎研究成果が報告されていた。

私は **Machine Perfusion Preservation**（臓器機械灌流保存）のセッションにおいて、“ラット脂肪肝保存における、単純冷保存に対する室温灌流保存の有用性”について発表討論を行った。

本邦では肝臓を含む固形臓器に対する灌流保存の研究自体が数施設で行われているのみであり、臓器移植の関連学会においても灌流保存を扱うセッションや議論の場が非常に少ないのが現状である。肝移植領域において世界中でドナー不足が問題となっており、脂肪肝や心停止後肝臓などの境界（障害）グラフトの移植利用が不可欠とされている。しかしながら、現状の単純冷却保存のみでは保存・再灌流に関連する臓器障害が高度となるために境界グラフトの移植成

績は不良であり、単純冷却保存にかわりうる灌流保存方法の研究が欧米を中心に盛んである。灌流保存は再灌流傷害の回避軽減のみならず、保存中のグラフト機能評価や保存中のグラフト治療が可能になると期待されている。

本学会でも私が発表したセッションのみならず、灌流保存を取り扱うセッション・発表が数多くあり、特に **Global warming in transplantation – LIVE**

CASTED (9月14日)ではチューリッヒ大学、エディンバラ大学、ハーバード大学の本研究で世界をリードする研究者の口演を直接聞く機会が得られたのは非常に有意義であった。しかしながら灌流保存といっても、低温灌流保存、常温灌流保存、超冷却保存とその方法は様々で一定の見解は得られておらず、実ヒト臨床への応用は依然として研究段階であることも事実であり、本研究の重要性・発展性をあらためて再認識できる機会であった。

私の発表セッションでは、肝臓のみならず腎臓、膵臓、心臓、肺を含む多臓器に対する灌流保存の10演題が発表された。100名規模の会場ではあったが満席であり、関心の高さを感じることができた。私は単純冷却保存では再灌流後に高度な障害を受ける高度脂肪肝に対して、室温灌流保存を行うことで再灌流後の障害を有意に抑制できたという内容で発表した。発表に対しては実験で使ったラット脂肪肝の程度、灌流温度として室温を選択した理由などが質問された。脂肪肝の程度は、現在臨床で一般に行われている単純冷却保存では破棄されてしまう高度の脂肪肝(50-60%程度)を使用したということで理解いただいた。灌流温度に関しては簡便性や冷却障害の回避という点で室温を採用しているという回答を行ったが、灌流温度の比較実験を行う必要性を認識した。

置を作成している状況であるが、今後は灌流装置の開発も検討しており有意義であった。



本学会に参加し、現在進めている研究の重要性・関心の高さを肌で直接感じることができたのと同時に、世界と比較して遅れている現状も認識でき、今後の研究へのモチベーションへとつなげたい。

今回は大変貴重な機会をいただき、深謝いたします。

岡村裕輔